講義ノート

山の神と山村生活

倉石あつ子

はじめに

本稿は、15年度民俗学春学期に於ける講義ノートの一端であるが、本論に入る前にシラバスに掲載した今年度のテーマと授業目的・目標を掲げておく。

授業題目は「暮らしの中の自然—山村に学ぶ自然との共存—」である。

シラバスに書かれた授業の目的・目標および授業概要は、以下の通りである。

「自然とは何か、自然を大切にするとはどういうことなのか、自然と共存してきた「山村」のあり方を通して考える。民俗学は草創期から、「山村」に注目して研究対象としてきた。そこには都市化した地域では失われてしまったさまざまな民間伝承が残されていたからである。原点に戻り、「山村」を考えることによって、私たちの生活を見直すことを目標とする。」

授業の概要

「日本には山に依存し、「やま」の恵みを活用しつつ生きてきた人々がいた。現在の私たちはとかく「やま」の暮らしを貧しく不便なものとして捉えがちだが、「やま」に住む人々は実は豊かで崇高な考え方をもちながら暮らしてきた。それらの人々の特に自然に対する考え方を見直すとともに、私たちが山から受けている恩恵の数々と、「やま」と私たちの関係を再確認するとともに、「やま」に生きる人々の具体的な暮らしを紹介し、私たちがそこから学べることを考える。

一　山村に対する学生のイメージ

現在、都市に暮らす私たちは、山村に対して非常に表面的なイメージしか抱き得ない。水や電気など生活に欠かせない恩恵のほか、かつては薪炭などの日常的な燃料も山村に依存していた。そうしたことを日々頭に思い浮かべ、それらを維持するためにどういう人々がどういう働きをしているか（していたか）といったことを考えながら生活をしている人は少ない。ましてや、山村には既に私たちが捨て去ってしまった独特の文化や神に対する考え方が残っていたことなどに、思いを馳せる事はないだろう。山村に対する現在の学生たちのイメージは

非常に表面化している。

「山村に対する自身のイメージを幾つでも揚げなさい」という学生へ簡単なアンケートの答えは、プラスイメージとマイナスイメージに分かれる。プラスイメージとしては、自然がいっぱい・田園風景・緑がいっぱい・森や林・のどか・温和な人々であり、マイナスイメージとしては交通が不便・店がない・遊ぶところがない・年寄りばかり・人の目がうるさいといったもので、答えには表面的なことが多い。自然の厳しさや災害、山林維持の大変さ、水源の維持などといったことに目を向けた学生は皆無といってよい。そして、具体的にイメージする山村はどこかという問いには、祖父母の住む町や村の名前を上げた学生が圧倒的に多く、ついで地理的条件としての山が象徴する長野県・岐阜県・山梨県・福島県などがあげられている。こうした回答を見ると、すでに私たちの生活の中から具体的な「やま」とか「山村」とかというものがいかに遠のいているかが分かる。

しかし、学生たちが「山村」に対してまったく関心をもっていないのではない。なぜなら、学生たちの圧倒的多数の答えとして（百八十名中七～八割）上げられているものが「ダッシュ村」であった。「ダッシュ村」は日本テレビで日曜日夜七時から放映している番組名である。福島県あたりと思しき廃屋を買い取り、アイドルＴＯＫＩＯが村づくりをする番組で、二〇〇〇年六月からの放映だという。今村司プロデューサー企画によるもので、「便利だと思われているものを捨て、人の知恵で自然と闘ってみよう」という約束をＴＯＫＩＯと交わして始められた番組である。もちろん、ダッシュ村の近くに住む人々の力も借りてはいるが、映像を通して「自然と闘う人の姿」が感じ取れるところに共感がもたれているようである。視聴者の中には気持ちが癒される・昔ながらの農村風景にほっとする・ダッシュ村を見ているうちに久しぶりに親に電話をした・田舎に帰りたいと思っているといった反応があるというが（資料　今村司「わが「ＤＡＳＨ村」の願い」『出版ダイジェスト』臨時増刊号　２００３年　12月15日　本稿では割愛する）、学生たちも農村風景にほっとするからといった答えを返してくれたものが多かった。

「これが山村なんだと思えるような風景」という答えもあった。決して山の暮らしや「山村」そのものに関心がないわけではなく、そうしたものを目にする機会がなく、関心のもちようがなかったことが分かる。そして、テレビという作られた世界ではあるが、放映される生活の内容にはかつては当たり前であったが現在では新鮮にさえ見えるさまざまな知恵（民間伝承）が各所で紹介され、それが魅力となって画面にひきつけられているようである。

二　民俗学と山村研究

実はそうした民間伝承を扱ってきたのは民俗学であった。民俗学の創始者とか民俗学の父とかといわれている柳田國男が民俗学に足を踏み入れたのは、まだ農商務省の

役人として「農村改良運動」の講演のために訪れた宮崎県椎葉村での経験がきっかけになったからであった。柳田は椎葉で村長中瀬淳に五夜にわたって狩の話を聞くが、それは既に都市や農業を主体とする平坦地のムラなどでは聞き取りえない内容であった。特に古語とも言える言葉がたくさん伝えられており、「山におればかくまでも今に遠いものであろうか。思うに古今は直立する一の棒ではなくて、山地に向けてこれを横に寝かしたようなのがわが国のさまである」と、後の方言周圏論（資料）のさきがけとなる考えを述べている（柳田国男「後狩詞記」『柳田国男全集』5巻　ちくま文庫　1989年）。

さらにその翌年には岩手県遠野出身の佐々木喜善が語る遠野の伝説や昔話を『遠野物語』（『柳田国男全集』4巻　ちくま文庫　一九八九年　授業では資料として題目を紹介）としてまとめている。遠野もやはり山深い小盆地である。早池峰・附馬牛・六角牛などの山にまつわる山の神や山人の話、おしらさま・ざしきわらし・オクナイサマなどの伝承、河童・猿・狼・熊・狐など地域に生息すると考えられている動物にまつわる伝説などなど平地に暮らす人々には興味深い話、一一九話が収められている。柳田はやはり「やま」でなくては語られない話と捉え、「もっと語って平地人をして戦慄せしめよ」（資料1）と、文献などではほとんど語られることのない生の山の生活（解説で永池健二は民衆の内側の歴史と表現している）が解明されていくことを期待している。このように、民俗学の父といわれる柳田が最初に関心を持ったのは「やま」の暮らしであった。

初期の『後狩詞記』や『遠野物語』は、詞によって伝承されているものだけが扱われているが、柳田を中心にした研究会「郷土会」などが発足し、柳田以外の研究者も民俗学に興味を持ち始める。中でも鈴木重光は自分の居住地である神奈川県津久井郡内郷村（現相模湖町）の伝説や年中行事、山に生息する動植物などについて自身の体験や聞き取りをまとめ、「民俗誌」としての『相州内郷話』を一九二四年に発刊している。郷土会を中心に当時の柳田を巡る人々の中には、新渡戸稲造・小田内通敏・中山太郎・今和次郎など錚々たるメンバーがおり、そうした人々によってさまざまな分野の情報が柳田の元にもたらされるとともに、民俗学の裾野は次第に広がっていった。民俗学的な活動も次第に活発になり、郷土会を中心に研究会を重ねたり、いわゆる民俗調査を試みたりしつつ、さらに民俗学に興味を持つ人々の輪は広がっていった。

ただし、民俗学の資料は古いものを求めようとする姿勢もこのころから出来上がり、いかにして古いものに出会うかが良い調査であるかのような誤った考え方も形成されていった。民俗調査といえば交通の不便な山の中の村などに行くものだという錯覚ももたれるようになってしまい、そうした考え方は近年まで続いていた。しかし、そうした考え方がいかに表面的な山村の捉え方であるかは、最初の学生アンケート紹介の

折に述べたとおりである。また、民俗学は、骨董趣味的な古い事柄ばかりを掘り起こすことを目的としているのではない。生活の中に生起するさまざまな問題の原因がどこにあるのかを探り、その解決の糸口を見つけ、いかにしたら人々（この中には自分も入っている）が少しでも幸せな生活ができるようになるかを考えていく学問である。したがって、そうしたことを考える中で過去の生活を振り返ってみることによって、何か参考になるものがあるかもしれない、取り入れられるものがあるかもしれないので、過去の生活を振り返ってみるのである。つまり、過去の生活を見ることが目的ではなく、過去の生活の中に現代の生活に生かせるものがあるのではないかと考えるために、過去の生活を見るのである。

本授業もそうした姿勢の上に立つものである。

◆実際の講義は、ここまでが山村研究を含んだ民俗学概説である。この後、山村の定義・山村に伝わる村開発伝承・消滅してしまった（あるいはほとんど消滅しかかっている）山に依拠する職業（マタギ・臼作り・杓子作り・ボッカ・屋根板割り・松脂掻き・硝煙作り・砂金掘りなどなどのほか一九六〇年以降炭焼きも急激に減少した）とそれらの人々が伝えてきた伝承を挟んでいるが紙幅の関係上本稿では省略する。

三　山村の山の神と農村の山の神

山の中での仕事は、「板こ一枚下は地獄」といわれる海の仕事同様、命がけである。例えば木を伐りだすときなども、ただ黙々と仕事をしていたのではいったいいつ木が倒れるのか、どっちの方角へ倒れるのか分からない。うっかりしていれば一緒に作業をしている仲間を下敷きにしてしまうようなことも起こりかねない。また、伐った木を運び出す時も、急な斜面を滑り落としたり、キンマ（木馬）と呼ぶそりに載せて運び出したり、川まで木を滑らせて落としたり川の水をせき止めた中に木を入れて堰をはずすことによって水の勢いで下流に運び出すなど様々な方法が取られるが、どれをとってもひとつ間違えば怪我や死につながる。そのために、山に宿り山の生きとし生けるものを領有し、支配すると考えられる山の神を祭ることによって、安全を祈願した。

ところで山の神と一般的に言っているものは総称であって、地域によって神名を呼んだり、祭日が神名になっていたりとさまざまで、それにまつわる伝承もまたさまざまである。したがって、そうした伝承を細かく見ていくと、神の性格を知ることもできる（資料2山の神の呼び名　多くの資料の内から本稿では代表的なものだけを掲げた）。さまざまな資料から山の神の伝承を整理してみると、次のようなことが言える。

①山の神は山中にある特定の木（古木・窓木・枝振りのいい木など）や場所にいると考えられている。

②特定の神名をもっている。

③山仕事をする人は山の神を敬い恐れてい

る。

④山の中の運不運は山の神の喜怒哀楽によってもたらされる。

⑤山の神は男・女・夫婦などが考えられ、それぞれに伝承をもつ。

⑥山の神は穢れを嫌う（特の女性の穢れを嫌う場合が多い）。

⑦産神として安産をつかさどる（大摩小摩の物語・産神問答など。詳細割愛）

したがって、山中では山の神の怒りに触れるような行為は慎むとともに、山の神のツカワシメと考えられている猿・鹿・熊・山犬・猪・おこじょ・鳩などは大切に扱う。熊などを狩ったときには、山の神からの恵みとして心臓を山の神にささげてから腑分けをするし、木を伐るときにも山の神の許しを得るトブサタテなど木もらいの儀礼をしてから伐る。こうした伝承とともに山の神に対してしてはならないことも多い。たとえば、山の神祭りの日に山へ入ってはいけないと伝えるところが多く、禁を犯すと必ず悪いことがあると信じられている（資料3）。特に山の神の怒りをかうのは、穢れたままの人が山中に入ったときで、ほぼ日本全国から事例をあげることができる。山仕事をする人々にとって、山は山の神の支配下にあり、そこに住む動植物は山の神の所有するものと考えていたからこそ、伐採や狩猟に先立っては必ず神の許しを得るための儀礼を行ったのであった。そしてこうした仕事は一人ではなく、集団で協力し合いながら行うことが多かったので、神祭りも当然の事ながら集団で行うことになったのである。山の神のご機嫌を損じないことが、安全を保障することであり、獲物や良い木を手に入れる最良の方法であった。山は特別の空間であるからこそ、そこで働く人々も常の状態とは異なる行為が必要であったのである（資料4）。

いっぽう、農村にも山の神信仰はあり、山の神の祭日などが定められているところが多い。祭日も山村の山の神信仰と同様であるし、男神であるとか女神であるといった伝承も見られる。また、祭日に山へ入ってはいけないという伝承もある。では、何が違うのか。一番の違いは農村の山の神の場合、春と秋とで神が居場所を変えることである。勿論、そうした伝承をもたないところもあるが、春先、山の神が里に降りてきて田の神となり、秋、山の神となって山に戻っていくという伝承が極めて広い範囲に分布している。山と里との間を季節によって往来するという特色をもっているのが農村の山の神の特色で、山村の山の神と違うところである。そして、山仕事に従事する人々が集団で祭りをする傾向にあるのに対し、農村では家ごとに祭りが行われたり、女性や子供の講になっている点も山村とは趣を異にしている。また、山と里を往来するという伝承をもちながら、山のどこに帰っていくのかといった点も曖昧模糊としている。農耕の安全と豊作を守護してもらえば、その後の神の存在はどこに居ようが忘れられている存在といっても過言ではない。年間を通して毎日祭る山村の人々の山の神に対する観念とは異なり、農村の山の神は

要するに田の守護神としての性格を強くもとめらているということになる。

山村の人々にとって山の神は「やま」そのものに宿る神霊であり、山全体がその神霊の支配する神聖な場所であると考えているのである。したがって、伐りすぎたり、採り過ぎたり、荒らしてしまったりしては当然のことながら、山の神の怒りをかうことになるわけである。神の居る神聖なところだからこそそこにある動植物を大切にし、神の居場所であるからこそ手を入れてきれいな森や林を維持してきたのである。

里（特に都市）に居る私たちは、そうした人々の努力によってもち伝えられてきた「やま」によって、水を得、電気を得、美味しいたらの芽やわらびや茸や栗やあけびを口にし、お椀や臼を使い、災害から守られてきたのである。現在でも山仕事に従事する人々は存在するが、その数は年々減少傾向をたどるとともに、山村の高齢化も進行し、自分では「やま」の維持ができなくなり、専業者にゆだねる傾向も出てきている。そうした状況は、当然のことながら山村のもち伝えた文化や生活技術・知恵をも急激に消滅へと向かわせているのである。

◆講義はこの後、ダム開発によって湖底に沈んだ村々と、離村した人々の村に対する思いや今後の生活の不安などを紹介して終わる。

資料1　この話はすべて遠野の人佐々木鏡石（喜善）君より聞きたり。昨明治四十二年の二月ごろより始めて夜分折々訪ねて来たりこの話をせられしを筆記せしなり。鏡石君は話し上手にはあらざれ度も誠実なる人なり。自分もまた一字一句を加減せず感じたるままを書きたり。思うに遠野郷にはこの類の物語なお数百件あるならん。我々はより多くを聞かんことを切望す。国内の山村にして遠野よりさらに物深き所にはまた無数の山神山人の伝説あるべし。願わくはこれを語りて平地人をして戦慄せしめよ。この書のごときは陳勝呉広のみ。

資料2　山の神の呼び名・祭り

①山の神＝ほぼ全国的にみられる呼び名である。男神とか女神・夫婦神などさまざまな伝承がある。祭日は正月・2月・10月・11月・12月のうちいずれかの年二回とするところが多く、7・17・16・9・12日などが比較的多い。

②十二さま＝長野県北部から新潟県にかけて。毎月12日が祭日であるのに由来するとみられる。十二山の神様ともいう。

③サガミ様＝山形県西田川郡など。相模の国から飛来した神といわれている。女神できれい好きなので、山に入るときには必ず髭を剃っていき、山にいる間は髭を剃ってはいけない。山小屋にいる間は毎朝ご飯が炊けると「山の神様に上げます」といってご飯をお供えする。

④その他＝おさとさま・大山祇神・木花開耶姫など

⑤奈良県吉野郡上北山村　山の神と呼んでいる。醜い姿の女神なので、供え物は自分より醜い姿のオコゼを好む。祭日は正月2日と11月7日。講の当屋に集まって

祭りを行う。山の神はそれぞれの山の祠に祭られているほか、山の神が休んでいるといわれる木もある。祭日にはこれらの祠にケズリカケ・ヘノコ（男根）一対・おこぜ・野菜・するめ・杉の木で作った筏に奉納と書いたものなどを供える。なお、山の中で失せ物をしたときには自分（男性）の性器をみせ伊勢音頭などの祝い歌を歌うと見つかるといわれている。

⑥長野県下伊那郡天龍村坂部　2月7日・11月7日が山の神の祭日。氏子総代が各戸から米一升五合を集めコワメシとシロモチ（オハタキ・オコナともいう）をつくり、お神酒・オタカラとともに山の神の祠に供える。山の神はムラ共有のものと各戸で祭るものと双方存在する。毎年決まった祭日に祭るほか、焼畑の火入れをする日、山仕事を始める日にも山の神を祭る。山の神は尾根にある木の東に突き出た枝の上で休んでいたり、盛り上がった地形のところに生えている木にいると信じられ、そうした木を伐ると祟られる・山の神が暴れるという。山の神が嫌うのは月経や出産による血の不浄（チミチ）と死の穢れ（ムラ穢れ）であり、穢れているものは三日から一週間山へ入ってはいけない。

⑦愛知県北設楽郡振草村　山の神を祭るときは身を慎み、穢れを避けることを嫌いオトウ（当屋）は水行をして身を清めて当番に当たる。

⑧滋賀県近江地方　木地屋の間では山の神は夫婦神といわれたり、山の神が男で水神が女で二神は夫婦であるといわれたりしている。

資料3　山の神に対する禁忌（たとえば長野県下伊那郡南信濃村・静岡県気多郡など）

山の講の日は山仕事を休む。春は木生みの日といって山の神が木種をまき、秋はそれを見回ったり刈り取ったりするから邪魔をしてはならない。あるいは12人の子供を生むからこの日山に入ると子供と間違えられて数に入れられてしまい、家に帰ることができなくなってしまう。山小屋に泊まるときも7人とか12人とかで泊まってはいけない。もし、そうなったときにはサンスケ（地域によっては八助坊）と呼ぶ木の人形を作って、一人に見立てる。

資料4　山言葉（常の空間と違う行為の一つとして山言葉がある）

米＝くさのみ　着る＝かつぐ　食器類の総称＝かちょ　子供＝いらかひだき　にわとり＝にかねはむし　猿＝えてこう　などなどたくさんの言葉があり、仕事の先輩から教えてもらった。このほか、死にごと・仏ごと・お産ごとの話・猿の話はしてはいけない、火に当たるとき指を組み合わせてはいけない、神様におまいりするときは手を叩いてはいけない、汁かけ飯を食べてはいけないなど、行為に関わる禁忌もある。掟を破ると罰として水垢離をとる。山小屋内での喧嘩・博打も厳禁で掟破りは追放された。

参考文献

千葉徳爾『続　狩猟伝承研究』１９７１年
文化庁文化財保護部編「赤谷郷の狩猟習俗」『民俗資料選書』１９７４年
藤田佳久『日本の山村』地人書房　１９８１年
千葉徳爾「山の民俗」『日本民俗文化大系』５　１９８３年
湯川洋司『変容する山村－民俗再考－』日本エディター出版　１９９１年
田口洋美『越後三面山人記－マタギの自然観に習う－』１９９２年
赤坂憲雄『山の精神史－柳田国男の発生－』小学館ライブラリー　１９９６年
その他事例紹介のため長野県史を初めとする報告書多数（今回は割愛）

注　授業では資料紹介のために毎回レジュメを作って配布している。本稿ではそれらに使用した事例の数々や図版などは掲載し得なかった。稿を改めて詳細を述べるつもりである。